

# 授業における学習内容の明示化

— カリキュラムの質的評価の試み —

田 代 裕 一

Clarifying Contents of Lesson Practice :  
An Attempt of Qualitative Evaluation of Curriculum

Yuichi Tashiro

## 1. 研究の目的

本研究の目的は、「発言表」を使用する授業分析、および「学習内容の展開図」の検討を通して、連続する授業における学習内容の展開（生成・変化）を明示化することである。なお、ここでいう学習内容とは、その授業で予め指導案に設定されているような「学習すべき内容」ではなく、その授業で子どもたちが実際に「学びつつある内容」を意味している。筆者はこれまで 定性的な授業分析<sup>1)</sup>に基づいて授業実践研究を進めてきたが、カリキュラム研究への授業分析の援用も若干、試みてきた。<sup>2)</sup> その際、同一単元内で3～5回の授業を取り上げて分析を行ってきた。<sup>3)</sup> しかし、今回は単元の中核をなす授業を限定的に取り上げて（2回の授業）、検討する。それは、数は少なくとも、中核的な授業を詳細に分析することで、単元レベルでのカリキュラムの質的評価に有効な情報を提供することができると思ったことによる。なお、カリキュラムの質的評価では、カリキュラムの具体的な展開過程の実際、およびその中での子どもの変容を特に詳しく見ていく必要がある。<sup>4)</sup>

## 2. 研究の方法

本研究では「発言表」というツールを用いた授業分析を行うので、以下、「発言表」<sup>5)</sup>について若干説明しておく。「発言表」は基本的に、発言者名欄及び、

発言状況欄からなる。発言状況欄には、授業記録上の全発言の長さを、縦の実線として記入する。本研究では授業記録（雑誌「考える子ども」等に掲載）での発言記録の二行分（一行…24字程度）を罫線の実線の一単位分になっている。さらに、授業において用いられた主要な言葉を記号化して載せている。ここでいう「主要な言葉」とは、授業の内容的構造を把握する上で重要であると分析者が判断して、選択した言葉を意味している。なお、1回の発言で、同一の「主要な言葉」が複数回出ても、1個の記号で表している。さらに、表中で注目すべきと思われる発言は点線で囲み、また、発言と発言の関係を線や矢印（…は言及的な発言、…→は反論、←…→は質問—応答や、議論といった双方向的なやり取りなど）で表している。右の発言内容の欄には、その授業での内容展開や言語的応答関係を示す上で、重要と思われる言葉を抽出して記載している（原文の約4分の1）。<sup>6)</sup>「発言表」の原版はB4判サイズだが、紙面の都合上、縮小（53%）している。

さらに本研究では、この「発言表」に現れた言葉を整理して、類似した内容として表示した「学習内容の展開図」を作成し、授業間での学習内容の生成・変化の様相を明確にしていきたい。話し合いを中心とする授業では、この出現した発言＝言葉そのものが、学習内容の内実をよく示していると考えられるのである。

### 3. 研究の対象

今回、取り上げる事例は、熊本県S小学校5年生F先生指導の社会科の実践（「手作業にこだわるシャツ工場の挑戦」2014年2学期実施）である。この実践を取り上げた理由は、授業での子どもの発言が多く、子ども同士の相互作用が活発であることから、これから重視される「主体的、対話的で深い学び」の在り方に示唆を与え得ること、また、大量生産の工場と手作業にこだわる工場の双方を教材としており、社会科の教材開発の面からも注目に値すること、さらに、授業記録が複数回採られており、連続的な分析が可能なこと、などである。なお、この実践は「社会科の初志をつらぬく会」<sup>7)</sup>2015年度夏季全国集会以て提案されている。検討する授業の記録は、本会の機関誌「考える子ども」

366号（2015年8月）に掲載された資料、並びに2015年8月9日の全国集会で配布された補助資料である。「考える子ども」の記載内容によると、F先生を目指す子ども像やその実現のための授業像は概略、以下の通りであった。

目の前の課題に果敢に挑み、そして謙虚さを持って真摯に向き合う子どもになってほしい。「知っているから」というだけでわかったふりをしたり、それを理解した気になったりして、面倒なこと、自分の利益にならないことを避けようとする子どもを変えたい。そのためには、聴き合い、語り合いながら追求していくことの面白さを、授業の中で感じさせていくことが必要である（下線は筆者による。以下も同様）。

このクラスは33名である。前担任からの申し送りでは、「私語が多く、なかなか人の話を聞けない、それを何とか変えようとする子どもも少なく、学び合うという雰囲気にはほど遠い」とのことであった。本実践ではMOとKTの2名を抽出児として設定している。F先生の抽出児への願いを少し整理して、下記に述べる。

#### MO について

前担任からの引継ぎにおいて、やる気に大きな差があり、気持ちが乗らない時には全く関心を示さない、と伝えられた。授業中も全く関心を示さない態度をとったり、ひたすら伏せたりしていることも多い。まわりとの関係も悪く、ケンカも多かった。5年生になった4月に（朝、校庭掃除のボランティア活動をして）「役に立ててうれしいです。明日も頑張りたい。」と日記に書いて来た。「かけがえのない自分」に気づき、自分に自信を持ち、よりよい自分を目指して生きてほしい。そして友だちと聴き合い、語り合う中で自分なりの答えを追究していく活動の面白さを知って欲しい。

#### KT について

性格的には穏やかで、友だちとのトラブルもないが、自分から何かやろうという積極的な姿勢は見せない。学力には自信があり、授業中もまとめたり、詳しく説明したりすることに自分の存在価値を見出している。しかし生活経験が乏しく、自分の都合が最優先になりがちであり、友だちとのコミュニケーションがうまく取れていないことも感じる。丁寧に取り組む

ことには価値があることを実感して欲しい。苦手なこと面倒なことにも価値があることにも挑む気持ちを育てたい。また人と関わりを持つことで、ものの見方を広げ、自分とは違う考え方を持つ友だちの思いや願いにも共感出来る人になって欲しい。

本単元の教材については以下のように記されている。

親会社の経営破綻を受け、一時は閉鎖寸前に追い込まれたものの、現社長と工場長が「日本が誇るこの技術を廃れさせるわけにはいかない」という思いで事業を受け継ぎ、平成22年に再出発した縫製工場を取り上げた。新しく出発した会社（Hシャツ）は、機械に頼る大量生産方式でなく、職人の技術を生かしたこだわりのあるシャツ作りをすることで商品に付加価値を生み出した。また平成23年には自社ブランドを立ち上げた。

単元の前半では、自動車のペーパークラフトを何度も行った。次に自動車工場を学習し、機械化・自動化により、より速く、安全・確実に作業が行われるようになり、それは様々な工業生産において主流になっているという認識を持たせようとした。後半、「機械を捨て、職人の手作業に変えたシャツ工場がある」という事実をぶつけた。単元計画は以下の通りである。

- ①体験を通し一人で作ることの大変さに気づく。
- ②自動車工場の工夫について考える。
- ③大量生産するための工夫に気付く。
- ④機械の導入やオートメーションの有効性について話し合う。
- ⑤オートメーションに焦点を当て、自動車工場や他の工場についてさらに調べる。
- ⑥全自動のミシンを替えた工場について考える。
- ⑦～⑨この工場のシャツが売れている理由について調べ、話し合う。
- ⑩～⑪自社ブランドを作り出した理由について話し合う。

…本研究での事例1、事例2に相当する。

…教師による子どもの考えの予想。

- ・自分たちが作りたいものを作る
- ・やりがい
- ・もっと利益を出したい

⑫ブランド名による会社名を選択したことについて話し合う。

また、本教材に関連づけた抽出見への願いが以下のように記されている。

MOについて

プラモデル作りが好きであり、普段なかなか学習に身が入らないが、この教材であればきっと興味を持って学習に参加できると感じた。そしてこの学習で登場する、苦境の中でもたくましく生きる職人の姿を通して、かけがえのない自分の存在に気づき、自己有用感を高めてほしい。

KTについて

これまで影の存在であった職人に光を当てることによってやりがいと誇りを引き出した工場長の思いについて考えることを通して、人を動かすのは利益や効率だけではないことに気づいて欲しいと願った。そして普段リスクを決して冒そうとしないKTに、リスクを冒しながらも夢や希望をもって挑戦することや、多少時間がかかっても丁寧にすることの価値に気づいて欲しいと考えた。

#### 4. 各事例の授業分析

本研究で取り上げるのは「H シャツが自社ブランドを立ち上げた理由」について考える2回の授業である。これらの授業はそれまでの諸活動を集約した、いわば単元の「山場」に相当するものである。

事例の分析に際しては、文末の「発言表」を参照されたい。アルファベット(2文字)は子ども、Tは教師、Cは不特定多数の子ども、もしくは発言者不明の子どもの略号である。なお、本授業記録は授業者自身が作成したものである。

##### 〈事例1〉

○「なぜシャツ工場は自社ブランドを立ち上げたのか」①2014年11月27日…この事例の授業記録は、「考える子ども」366号(2015年8月)50～68頁に掲載されている。以下の分節分け、および分析は筆者による(事例2も同様)。

・ 第1分節 (T1～T14)

教師がMOを最初に指名している。MOがHシャツは他の破綻した業者の人に自信をつけさせ、熊本の工業を盛んにするために自社ブランドを作ったという意見を述べ、それに対する質問や意見が出ている。

・ 第2分節 (T15～T30)

MOに対して自社ブランドを作ってどのように勇気づけるのか確認がなされ、その後、意見が出ている。

・ 第3分節 (T31～KM35)

他の会社を勇気づけても費用の無駄になるというKTの意見について検討されている。

・ 第4分節 (T36～TM43)

教師が子どもたちに調べたことを発言するように求め、倒産する会社の増加や製造出荷額の減少について発言が出ている。

・ 第5分節 (T44～SA48)

教師がなぜ(日本の商品が)売れなくなったのかと質問し、バブルショックがあった、東南アジアの安い製品が日本に輸入されている、若い人たちが工場に就職しない、といった意見が出ている。

・ 第6分節 (T49～YK63)

教師がなぜ若い人たちは工場に就職しないのかと質問し、給料が少ない、手作業は面白くない、いつ倒産するかわからない、といった意見が出ている。

・ 第7分節 (T64～T72)

教師がみんなはこの縫製工場で働くかと尋ね、子どもたちは面倒くさい、行くかもしれない等と発言している。

・ 第8分節 (T73～T75)

教師が授業で分かったことを確認し、子どもたちは工場の給料が安い、工場数が減っている、と発言している。教師はそのような中で他の工場を勇気づけるため自社ブランドを立ち上げたという考えに納得できるか、と述べて、自分の意見を書くよう指示している。

### ○授業の発言状況…コミュニケーションの過程

授業全体での教師の発言は19回、子どもの発言は56回で、教師と子どもの発言回数比は1対2.9である。子どもはC（不特定・多数）を除いて22名が発言しており、クラスの3分の2の発言がある。子どもからは3単位以上の発言が18回ある。MOは10回、GTは6回、発言している。

第1分節では、第一発言者として指名されたMOが他の子どもや教師と応答しながら5回発言していた。第2分節では、11名の子どもが質問－応答や議論を積極的に行っていた。後半、3単位以上の長い発言もかなり出ていた。第3分節では、KTの発言に関連する意見が出ていた。KTを含めて4名の子どもが発言し、5単位以上の発言が3回あった。第4分節では、5名の子どもが短く発言していた。第5分節では、教師の問いに4名の子どもが意見を述べていた。第6分節では、教師の問いに9名の子どもが意見を述べていた。GTは3回発言して自分の意見を詳しく述べていた。第7分節では、教師の問いに4名の子どもが意見を述べていた。教師はMOを特に指名してその発言を促していた。第8分節では、教師がCと短く対応した後、5単位の長い発言を出していた。

このように本授業は前半（第1分節～第3分節）、子どもたちの間で質問－応答や議論がなされていたが、後半（第4分節～第7分節）は教師の問いかけに対する子どもたちの発言が列挙的に出ていた。また、子どもたちの発言自体は多かったが、分節の最初の発言は全て教師であり、授業の構成は教師が主導していた。

### ○主要な言葉の展開状況…学習内容の展開状況

本授業で、教師が子どもたちよりも先に用いている主要な言葉はT8の工場だけで、それ以外は子どもたちが先に用いていた。

第1分節では、MO3が破綻、頑張り、お金、儲かる、自信をつけさせ、熊本、工業、盛ん、自社ブランド、といった、多くの言葉を用いて、自社ブランドを作った理由について、頑張りば儲かるという自信を失業者につけさせて熊本の工業を盛んにするためだ、と経済的な面も意識した意見を出していた。YK10は破綻、会社、仲間、自信をつけさせを用いて、他の倒産した会社を仲間に入

れるのかとMOに確認していた。また、KT13はライバル、競争を用いて、そうするとライバルが増えて競争になるとMOへの反対意見を出していた。第2分節では、EM17が破綻、会社の他に、勇気づけを用いてMOへの補足説明をしているが、ここから、自信をつけさせに変わって、勇気づけが子どもたちに用いられている。勇気づけは第2分節で子どもたちから7回用いられている。その一方で、自信をつけさせは全く出ていない。またライバルが4回、競争が3回用いられるなど、(会社どうしは)ライバル関係にあり競争をしていることが述べられていた。KT23は無駄という言葉を用いて、勇気づけても費用が無駄だと主張していた。第3分節では、教師もT31が無駄を用いて、費用が無駄になるという意見について確認していた。ここでは、子どもたちから無駄、ライバルが3回用いられていた。第4分節では、子どもたちが破綻、会社を3回用いて、縫製業の現状について報告していた。第5分節では、子どもたちから工場が2回、輸入、破綻、会社、若い人、就職が各1回出て、(繊維製品の)輸入が増えている、若い人が工場に就職しない、といった縫製業の課題が述べられていた。第6分節では、子どもたちから若い人が6回、工場、手作業が5回、給料が4回、就職が3回用いられて、若い人が工場に就職しない理由が詳しく述べられていた。第7分節では、教師がT64で工場、就職を用いて、この工場にみんなは就職するかと尋ねていた。子どもたちから就職が4回、手作業が3回出て、工場への就職や手作業に対する意見が出ていた。第8分節では、C74が工場、給料、お金を用いて、授業でわかったこととして、お金が入らないので工場が減っていると述べていた。教師はT75で工場、輸入、自社ブランド、勇気づけを用いて、工場が減って輸入が増えているが、こんな中で(破綻した業者を)勇気づけるため自社ブランドを立ち上げたという話に納得できるか、と述べて授業を終えていた。

このように、本授業の前半(第1分節～第3分節)は、自社ブランドの目的や問題点に関する言葉(頑張れ、お金、儲かる、自信をつけさせ、熊本、工業、盛ん、自社ブランド、仲間、ライバル、競争、勇気づけ、無駄)が多く出ていた。また、勇気づけが議論のキーワードになっていた。後半(第4分節～第7分節)は若い人、就職、借金、輸入、手作業、給料、といった縫製業の現状を

示す言葉が多く出ていた。このように、授業の段階で学習内容にかなり違いがみられた。教師は工場を6回用いており、特に後半、工場のおかれている状況を追究させようとしていたことが伺えた。

11月27日の授業後の感想

MO

EMさんの意見には反対しづらいです。だって実際、縫製産業を行う会社も働く人も減っているから。

KT

「今ある工場を守っていくのが精一杯」ということなのだから、会社も自分たちの工場をなんとか守るので精一杯なのだから、勇気づけるような余裕はないのではないかと思います。

## 〈事例2〉

○「なぜシャツ工場は自社ブランドを立ち上げたのか」③2014年12月2日…

この事例の記録は、2015年8月9日の社会科の初志をつらぬく会全国集会の分科会で配布された補助資料に掲載されている。

### ・第1分節 (T1～YK10)

教師が最初にGTを指名している。GTは(破綻した業者を)勇気づけても工場働く人は高齢者でやめていくので無駄である、と発言している。それに対して意見が出ている。

### ・第2分節 (KT11～AY19)

KTがHシャツものんびり自社ブランドとか作っていたらあつという間につぶれて、工場も減ると発言している。それに対して意見が出ている。

### ・第3分節 (KN20～C29)

ライバルの意味について、KNやCが述べている。

### ・第4分節 (T30～T42)

教師がライバルはいた方がいいのかと尋ね、子どもたちはライバルがいることのメリット・デメリットについて意見を述べている。

## ・ 第5分節 (KT43～YK54)

KTがHシャツは他の会社の応援をする余裕はないと発言し、応援の中身が検討されている。アドバイスをする、お金を貸す、といった意見が出ている。

## ・ 第6分節 (T55～YK62)

教師がアドバイスやお金をあげることは一部しかできないと述べて、他の応援の方法を尋ねている。自社ブランドを作るとすごいと思われて、他の会社も頑張ろうとする、といった意見が出ている。もっとたくさん稼ぎたいから自社ブランドを作ったという意見も出ている。

## ・ 第7分節 (GT63～T74)

子どもたちから、他社の励みになるためだけに自社ブランドを作るのは変だ、このHシャツが倒産したら、他の会社も悲しくなって倒産するといった意見が出ている。教師は自分たちの考えをノートに書くように指示している。

## ○授業の発言状況…コミュニケーションの展開状況

授業全体での教師の発言は23回、子どもの発言は51回で、教師と子どもの発言回数比は1対2.2である。子どもの発言者は13名で、事例1と比べると少ない。教師は第1分節で3単位、第6分節で4単位の発言をしているが、それ以外は1、2単位の短い発言をしている。一方、子どもたちには、4単位以上の発言が18回ある。GTは8回、YKは7回、KTは5回、発言している。なお、事例1で第一発言者に指名されたMOはこの授業では発言していない。

第1分節では、7名の子どもが自分の意見を1回づつ列挙的に述べていた。3単位以上の発言が5回あった。第2分節では、7名の子どもが意見を詳しく述べていた。3単位以上の発言が7回と、ここでも比較的長い発言が多かった。初回発言者は1名で、発言者はあまり広がっていなかった。第3分節では、教師とKNやCとの間で短い質問-応答があった。発言は全て1単位であった。第4分節では、6名の子どもが発言して、議論が起きていた。NMは4単位、YKは5単位の発言をしていたが、それ以外は1～2単位の短い発言であった。第5分節では、KTの5単位の長い発言の後、教師の問いかけに対して、4名の子どもが発言していた。この分節では子どもたちから3単位以上の発言が

5回あった。第6分節では、教師の発言の後、4名の子どもが発言していた。HR、YKは2回発言していた。ここでも3単位以上の発言が5回あった。第7分節では、GTが5回発言していた。その他、KTが7単位、HTが4単位の発言をしていた。最後に教師が1単位の短い発言をして、授業を終えていた。

本授業では、子どもたちの長い発言が多く出て、意見を述べ合っていた。また、第2分節、第3分節、第5分節、第7分節は子どもの発言から始まるなど、子どもたちが授業の流れをつくっている箇所もあった。

#### ○主要な言葉の展開状況…学習内容の展開状況

本授業で、教師が子どもたちよりも先に用いている主要な言葉はT1の会社とT5のライバルだけで、それ以外は子どもたちが先に用いていた。

第1分節では、第一発言者であるGT2が勇気づけ、工場、無駄を用いて、勇気づけても工場働く人は高齢者が多くやめていくので無駄であるという意見を述べていた。KT3も勇気づけ、無駄、余裕はない、工場、会社、応援を用いて、他の会社を応援する余裕はないと主張していた。TY4は工場、勇気づけ、敵、応援を用いて、勇気づけると敵を応援することになる、と述べていた。教師はT5でTY4の出した敵をライバルという言葉で表現していた。MK8やYK10は輸入やライバルを用いて、輸入が増えているのでライバルとか言う場合じゃないと、KTやTYに反論していた。本分節では子どもから勇気づけが4回出て、自社ブランドの目的をめぐる議論が起きていた。第2分節では、KT11がライバル、工場、人吉、余裕はない、自社ブランド、倒産、熊本と、多くの言葉を用いて、のんびり自社ブランドを作ったらHシャツはすぐつぶれると述べていた。ここでは子どもたちからライバルが5回、会社、倒産が4回、自社ブランド、輸入が3回出て、自社ブランドの問題について議論が起きていた。第3分節では、子どもたちから競争が4回、戦いが2回、ライバルが1回出て、ライバル関係について検討されていた。教師も競争2回、戦い、ライバルを1回用いて対応し、Cから出た戦いを競争という言葉に変えていた。第4分節では、教師がT30でライバルを用いて、ライバルはいた方がいいのかと尋ねていた。子どもたちはライバルを6回、雑、丁寧を3回用いて、

ライバルのメリット・デメリットを述べていた。第5分節では、子どもたちから会社、アドバイスが4回出て、他社を応援することの意味が検討されていた。なお、ここでもKT43は余裕はない、工場、会社、人吉、応援、勇気づけを用いて、他の会社の応援をする余裕はないと主張していた。教師はお金を4回用いて、応援とは他社にお金を貸すことなのか、と応援とお金の関係を確認していた。第6分節では、教師がT55で余裕はない、応援、お金、アドバイス、勇気づけを用いて、応援は別にお金を出したりアドバイスをすることではないと考えていた子がいた、と述べて、その子たちの発言を促していた。HR56・57は工場、すごい、自社ブランド、勇気づけ、熊本を用いて、自社ブランドを作って頑張ることが、(他社に)すごいと思われ、それが勇気づけになる、と述べていた。この分節では、子どもたちから自社ブランドが4回、すごい、頑張るが3回、勇気づけが2回用いられて、自社ブランドの目的が深く検討されていた。第7分節では、KT66が頑張る、会社、励ます、お金、無駄、自社ブランドを用いて、自社ブランドは励みになる効果も少しはあったのかもしれないけど、ただ励みになるためだけに自社ブランドを作るのは変だ、と自分と異なる意見も少し受け入れながら自分の意見を述べていた。この分節では、子どもたちから会社が3回、倒産が2回用いられて、会社が倒産する問題(他の会社への影響)についても意見が出ていた。

本授業では、KTだけが余裕はないを用いており、他の子どもは用いていなかった。教師は、KTに余裕はないを用いて対応していた。

12月2日の授業後の感想

MO

国内生産がたった4.5%だから、ライバルなんて言ってる場合じゃない。他の会社を復活させて、日本で作る質のいいシャツを増やして輸入をもっと減らしていくべきだ。

KT

やっぱり勇気づけるためではない。工場で働く人の多くは高齢者なのだから、その人たちが勇気づけられてももう働くことができなくなってし

まって、結局意味がないだろうと思う。

## 5. 本実践における学習内容の展開…カリキュラムの質的評価

以上、本単元の2つの授業事例を分析してきたが、さらにここで授業間の学習内容の展開について検討することで、カリキュラムの質的評価を試みたい。「発言表」の最後に記した〈本実践における主要な言葉の一覧〉および、それをもとに作成した〈本実践での学習内容の展開図…授業実践の「言語的トポス」〉を参照されたい。ここで言う授業実践の「言語的トポス」<sup>7)</sup>とは、あるテーマのもとになされた授業実践における発言・表現の集積所であり、教育の世界での知的遺産として、類似性を持つ教育実践に対して活用可能性を持つものと考えている。

まず、事例1の授業と事例2の授業を内容的に比べてみると、事例1で主要な言葉として出て、事例2で出ていないのは自信をつけさせ、工業、盛ん、仲間、若い人、就職、借金、手作業、給料（計9個）であった。一方、事例2で新たに出現したのは余裕はない、応援、敵、人吉、戦い、雑、丁寧、励ます、アドバイス、すごい（計10個）であった。事例1と事例2で出現した主要な言葉は（各授業の共通のテーマである自社ブランドを除いて）、その類似性から、以下の6つの内容群にわけることができた。第1群（他社の応援）、第2群（財務状況）、第3群（企業の関係）、第4群（企業の運営）、第5群（国際経済）、第6群（工場への就職）である。以下、その内容群ごとに授業間の変化を見ていきたい。

第1群（他社の応援）では、事例1で出ていた自信をつけさせは事例2では出てない。その代わり、応援、励ます、アドバイス、すごいが出ており、他社への支援の内実についてより詳しい検討がなされたことが伺える。応援を最初に用いたのはTYで、その発言は勇気づけると敵を応援することになるという主張であった。その発言を受けて、教師は応援の内実を子どもたちに検討させ、そこから、自社ブランドを作ったことですごいと思われることが他社の励みになるという意見が現れた。

第2群（財務状況）では、事例1で出ていた借金という、企業の収支を表す

言葉が事例2で出なくなり、余裕はないという、企業の危機的状況をより切実に表す言葉が現れていた。この余裕はないはKTだけが用いていて（教師はこの言葉を用いてKTに対応している）、自社ブランドは他社を応援するためではないという主張の根拠にしていた。なお、教師のKTについてのカルテ（生活記録）をみると、KT自身、毎日の塾通い等で余裕のない生活を送っているようで、この言葉は彼の生活実感をよく示しているようにも思われる。

第3群（企業の関係）では、事例1で出ていた仲間が事例2で出なくなり、敵、戦い、雑、丁寧が出て、企業の関係についてより多面的に検討がなされていた。敵や戦いは厳しい企業関係を示す言葉である。雑、丁寧はライバルがいることの仕事へのプラス・マイナスの影響を表している。なお、事例2で教師は子どもたちが出した敵をライバルに、戦いを競争に変えていたが、その対応が適切であったのか、については検討の余地がある。

第4群（企業の運営）では、事例1で出ていた工業、盛んが事例2で出なくなっていた。その理由は、事例2が企業の状況よりも、他社への応援の中味の検討が主になったことによると思われる。一方、人吉が新たに出ているが、人吉はこのシャツ工場の場所やブランド名を示す言葉で、シャツ工場の方針・意図について、より焦点を絞って検討がなされたことを示している。

第5群（国際経済）では、事例1、事例2で輸入が共に用いられていた。ただ、事例1では縫製業の厳しい経営環境を示す根拠として、事例2では日本への輸入が多いので国内の縫製業をより振興させる必要がある（自社ブランドで勇気づけることには意義がある）という主張の根拠として用いられていた。

第6群（工場への就職）は事例1では若い人、就職、手作業、給料など、多くの言葉が出ていたが、事例2では出ていなかった。これは事例1でシャツ工場への就職状況について十分、説明と確認がなされたので、事例2ではもう話題にならなかったことによる。

以上のように言葉の生成・変化を見ると、事例1で現れた自社ブランドによる他社の支援の意味、およびシャツ工場を取り巻く経済的状況の全体的検討から、事例2では自社ブランドによる他社の具体的な支援内容により焦点を絞って検討がなされたことがわかる。また、事例2では、企業間の厳しい関係（敵、

戦い)についても確認がなされたことが伺える。子どもたちは事例1で企業を取り巻く状況を幅広く確かめ、事例2では相互に議論しながらシャツ工場の自社ブランドの意味を深く追究していたのである。

次に抽出児について見ていきたい。自社ブランドは無駄である、応援する余裕はないと強く主張していたKTも、事例2の最後の方では、励みになるっていう効果も少しはあったのかもしれないけど、と、他者の考えを少し受け入れている。このようにKTのものの考え方にも変化の兆しが見られた。その後の作文を見ると、KTは丁寧さや品質のよいものを作ることの大切さも意識していた。一方、MOは事例1での初回発言者として、破綻、頑張る、お金、儲かる、自信をつけさせ、熊本、工業、盛ん、自社ブランドと、経済面にも広く留意した意見を明確に述べていた。また手作業を用いて、手作業はきつくてもやりがいがある、と手作業のよさにも目を向けていた。事例2では発言はなかったが、その後の作文を併せてみていくと、MOが本単元で積極的に活動し、Hシャツのように勇気をもって取り組むことの大切さを認識したことがわかる。このように見てくると、本単元の実践展開は、(教師の当初の単元計画では他社をはげますために自社ブランドを立ち上げたのかという議論の発生は予定されていなかったようであるが)、子どもたち、特に抽出児にとって大きな意義があったと考えられる。

なお、単元の終わりに抽出児は下記のような作文を書いている。

MO

一度は倒産しても復活する。それには勇気がいるし、説得する力が必要だから社長はすごいです。がんばれば必ず幸せが訪れるということを学びました。

KT

僕が学んだことは、工業というのは「作ればよい」というだけでなく、品質のよいものを作ることが大切だということです。TNさんたちはそのことを知っていたから職人の技を取り入れたのだらうと思いました。(あじのブランド化の学習をした)漁業と同じで、丁寧にするのは大切なんだなと思いました。

次に本実践の課題（問題の所在）と思われる点についても言及しておきたい。本教材は、授業での子どもたちの積極的な発言や議論を促しており、これからの日本の産業のあり方を広く深く考えさせる上で確かに意義があったといえよう。ただ、（大人の高級）シャツという、子どもたちにとっては直接、生活上の関係が弱く、そのままでは興味を持ちにくい題材であることを考えれば、例えば家庭科での裁縫（手縫いやボタンつけなど）と関連づけて、その技術の卓越性を理解したり、家の人の衣服購入への意識を尋ねたりするなど、子どもたちの生活と教材とをより近づけていく取り組みが必要だったと思われる。それに比して車のペーパークラフトはかなり丁寧に行われている。その活動も大切だが、後半のシャツ工場が実践の山場だとすれば、ややバランス的に適切だったのか、検討の余地がある。本実践においては、シャツの手作りのよさ（丁寧さ）に言及する発言はみられたが、縫製技術の卓越性に言及する意見はあまりなかった。したがって、このように子どもの関心をより高め、追究の観点を持たせるための「中継点」が、今回、教科を超えて設定されることが必要だったと思われる。

次に教師の本実践での指導性についても述べておきたい。教師は、「…子どもたちが聴き合い、語り合う授業を目指す中で、教師はどのような役割を果たしていくべきかということが今の私の問題意識の中心にある」と述べている。全体的に見て本実践でF先生は子どもたちをよく理解して一人ひとりに丁寧に対応し、子ども個々の発言を大切にしているのであるが、若干気になったのは、教師による子どもの言葉の置き換えである。事例2で、子どもから出た敵をライバルに、戦いを競争に変えている。確かに敵や戦いは激しい言葉で、社会科の産業分野を構成する言葉としては一見、ライバルや競争の方が適切とも思われる。しかし、その分、子どもの本音、本当に言いたい気持ちをやや削いでしまい、追究活動に水を差してしまう可能性も考えられるのである。また敵や戦いという考え自体が間違っているわけではなく、企業間の激しい生存競争の側面をよく示している表現と見ることもできる。子どもの切実な問題の解決を重視する問題解決学習としては、ここでは、やはり一旦、受け止めていく必要もあったのではなかろうか。

さらに、抽出児への対応についても検討しておきたい。まず、MO に対してであるが、事例 1 で MO を第一発言者として設定し、意見を十分に述べさせている。ただ MO の出した意見については本授業でより全体的、本格的に検討する必要があったのではなかろうか。この授業の第 3 分節までは、確かにこの MO の意見が正面におかれて検討されていたが、それ以降は、縫製業を取り巻く事実の報告や確認が中心になっていた。F 先生自身、「…(T) 36 で調べたことに振ってしまったことで話し合いは活性化したが、話し合いが深められなかった原因かも知れない」と述べている。授業は MO が自分への反論に対して再度、意見を出すことなく終了している。本時において、たとえば AY29 は MO に反対意見を述べ、MO はどう思うかと尋ねてまでいるのである。しかし、教師はここで他の子ども (KT) に質問して、議論の機会を逸している。ちなみに事例 2 では MO は発言していない。また、これは問題とまではいえないが、注目すべきは事例 1 で、MO3 が、自社ブランドの目的として述べたのは (破綻した失業者に)「自信をつけ」させるということであったが、それが MO をフォローした EM17 によって「勇気づけ」るに変わっていった点である。その後、MO19 も他の子どもの質問に答える形で勇気づけを用いて発言しているので、MO 自身もこの言葉にあまり違和感はなかったようであるが、自信をつけさせると勇気づけるでは微妙な違いがある。勇気づけるに比べて自信をつけさせるは、やはりその自信の根拠となるものが少し必要であるし、MO もがんばれば儲かるといった内容を述べていたのである。このように MO が本当に言いたかったことがズレた可能性も考えられる。細かいことかもしれないが、抽出児に設定して本時の第一発言者としてあえて位置づけたのであれば、このような点への意識 (どのように対応するかは微妙であるが) も教師には求められるのである。

次に KT に対してであるが、事例 2 の終わりの方 (第 7 分節) で KT は、「励みになるっていう効果も少しはあったのかも知れないけど、ただ励みになるためだけに」と、限定的ではあるが、「自社ブランド=他社の勇気づけ」説を一部承認しているのである。そこで教師はこの KT の意見の揺れについてこの場で明確に確認しておく必要があったように思われる。この微かではあるが、他

者の意見を少し受け入れていることこそ教師がKTに願っていた姿だったのではなからうか。教師は本実践のカルテ（子どもの理解と見取りのメモ）においてKTは、他の子どもに対して「そういう考えもわかるけど、でもぼくは…と思うんです」と自己の主張をつらぬく、ととらえている。しかし、そのような場合に他者の考えがどのようにわかるのか、どこまでわかるのかと、その微妙な同意できる点について確認していくことが大事なのでなからうか。一挙に自分の考えを変えるのではなく、少し取り入れた部分を貴重なものとして評価していけばいいのではなからうか。しかし、この場面ではGTが続いて発言しており、その機会は失われている。そして、KTは本時の感想で「やっぱり勇気づけるためではない。工場で働く人の多くは高齢者だから、その人たちが勇気づけられてももう働くことができなくなってしまって、結局意味がないだろうと思う」と、自分の意見の（微妙な、しかし重要な）揺れを自覚することなく、元の立場に落ち着いている。ただ、その根拠は自分が当初述べていた「他の会社＝ライバル」「余裕がない」説というよりも、GTの「高齢者＝働く人がいなくなる」説に置かれており、やはり少し考えが動いているのである。

以上のように見てくると、抽出児への対応に関して言えば、その意見の中心的な内容を把握して、授業の展開の中でその考えがどのように変化したのか、その微妙な動き、揺れについてよく確かめ、明確にすること、そしてそのことを評価することが必要だったと考えられるのである。

## 6. まとめ

以上のように、単元内の中核的な授業を少数取り上げて分析することで、単元における主要な学習内容の展開を明示化することができた。特に今回、2つの授業を個々別々にでなく、関連的に検討することで、それぞれの授業や抽出児の活動の意味についてもより明確に把握することができた（事例1…企業を取り巻く経済状況の把握、抽出児MOの積極的な提案、事例2…自社ブランドの意義の追究、抽出児KTの他者理解）。このことから、単元の中核的な授業を少数でも取り上げて、「発言表」および「学習内容の展開図」を用いて分析・検討することは、カリキュラム（単元）の質的評価として効果的であるといえ

るのではなからうか。<sup>8)</sup>

今後このような実践研究を積み上げていくことで、主体的、対話的で深い学びとしての「問題解決学習」の特徴、意義、課題を、具体的な授業レベルおよびカリキュラム（単元）レベルにおいて明らかにしていきたい。

### [注]

- 1) 重松鷹泰が創始した、授業の逐語記録に基づく「授業分析」に依拠している。重松鷹泰『授業分析の方法』明治図書 1961年。
- 2) 例えば、以下の論考では5つの「総合的な学習の時間」の授業事例を取り上げた。田代裕一「カリキュラムの展開過程の明示化 ―授業実践の様相-解釈的研究―」西南学院大学人間科学論集第14巻第2号 2019年2月。その他に、生活科や社会科学科においてそれぞれ3つの授業事例を取り上げて、カリキュラムの展開状況の明示化を試みた論考がある。
- 3) 安彦は、カリキュラム改善に授業研究が結びつくためには、単元レベルにおいて少なくとも複数の授業を取り上げて、カリキュラム評価の観点から授業研究を位置づけることが重要であると指摘している。安彦忠彦「第1章 カリキュラム研究と授業研究」日本教育方法学会『日本の授業研究 下巻』所収 学文社 2009年 18-19頁。
- 4) 安彦は、子どもの変容の質・量を基準として、カリキュラムの展開過程の諸要素を評価すべきだと述べている。同上19頁。筆者はカリキュラムの質の評価では、カリキュラムの展開過程の実際および子どもの質的变化の把握が特に重要だと考える。
- 5) 中村亨がこの「発言表」の理論やオリジナルタイプを考案した。中村亨「発言表を使用する授業分析 ―授業における子どもの相互関係にふれて―」『教育方法学研究』第12巻。田代はこの「発言表」の応用・開発に取り組んできた。1987年。田代裕一「発言表を使用する授業分析 ―ワープロ処理による授業の内容的構造の追究―」『教育方法学研究』第14巻 1989年、「授業実践の様相-解釈的研究 ―グループ活動を含む授業事例の分析―」『教育方法学研究』第35巻 2010年、など。
- 6) 今回、「発言表」は東芝のRupoV980で作成した。
- 7) 「社会科の初志をつらぬく会」は民主主義社会を支える人間の形成を目指し、そのための学習法として問題解決学習を重視している。
- 8) 中村雄二郎は、言語的トポスに関して以下のように述べている。「…すなわちギリシャ語では言語についてトポスとは、とりわけ、人間の知的・言語的な遺産としての、或る主題についてのさまざまな考え方、言い表し方の集積所（貯蔵庫）を意味している。」（『トポス 場所』弘文堂 1989年 7頁）。授業実践の「言語的トポス」とはこのような考え方を授業研究に援用したものである。











〈本実践における主要な言葉の一覧（出現順）〉

○事例1 (11月27日の授業)	○事例2 (12月2日の授業)
氷…破綻・倒産	→ 氷…倒産・つぶれ
㊦…頑張(れ・ろう・って)	→ ㊦…頑張(る・ろう・って)
\$…お金	→ \$…お金
Ω…儲か(る・ら)・儲け・稼いだ・売上げ	→ Ω…儲(か・け)・稼ぎ
♡…自信をつけさせ	→ ♡…熊本
♨…熊本	→
⊙…工業	→
♁…盛ん・盛り上げ	→ β…自社ブランド
β…自社ブランド	→ ⊙…会社・職場
⊙…会社・親会社	→ 全…工場
全…工場・親工場・縫製工場	→
&…仲間	→ ∞…ライバル
∞…ライバル	→ ズ…競争・競(う・い)
ズ…競争	→ ㊦…勇気づけ
㊦…勇気づけ	→ M…無駄・意味がない
M…無駄	→
↑…若い人・若い工員・若者	→ #…輸入
Φ…就職・入(ら・り)・働(こう・く)・行(く・き)	→
▼…借金・赤字	→ Σ…余裕はない・余裕がなく
#…輸入	→ ㊦…応援
Ψ…手作業	→ E…敵
Ⅱ…給料	→ Y…入吉
	→ ♨…戦(い・う)
	→ Z…雑
	→ T…丁寧
	→ ☆…励ます・励み
	→ A…アドバイス
	→ s…すごい

〈本実践での学習内容の展開図…授業実践の「言語的トボス」〉

○事例1		
β…自社ブランドM0 (第1冊)	\$…お金M0 Ω…儲かるM0 (第2冊) M…無駄KT ▼…借金KM	♨…熊本M0 氷…破綻M0 (第4冊) ⊙…工業M0 ♁…盛んM0 ⊙…会社M0 全…工場T
㊦…頑張れM0 (第1冊)	&…仲間YK ∞…ライバルKT (第3冊)	#…輸入ST (第5冊)
♡…自信をつけM0 ㊦…勇気づけEM	ズ…競争KT	↑…若い人YK Φ…就職RN (第6冊) Ⅱ…給料DS Ψ…手作業CT
○事例2		
β…自社ブランドGT (第1冊)	M…無駄GT Σ…余裕はないKT (第2冊) \$…お金KN Ω…儲かるGT	氷…倒産KN 全…工場GT (第4冊) ⊙…会社T Y…入吉KT ♨…熊本MK
㊦…応援TY (第1冊)	∞…ライバルT E…敵TY (第3冊)	#…輸入TY (第5冊)
㊦…勇気づけGT ㊦…頑張るKT ☆…励ますC A…アドバイスYK s…すごいHR	♨…戦いC ズ…競争KT Z…雑GT T…丁寧	

\* 主要な言葉の右側に、その言葉を授業で最初に用いた子どもの名前（仮名）を記している。